

『社会運動史』覚書き

池田嘉郎

はじめに

『社会運動史』は日本の西洋史研究に大きな足跡を残した雑誌である。一九七二年に創刊され、一九八五年に第一〇号で終刊した。紙面に溢れる方法上の模索や相互批判の熱意は、いまだにみずみずしさを失っていない。

二〇一三年に、岡本充弘の尽力で、同誌の発行母体である社会運動史研究会（一九七〇—一九八五）を検証する論集『歴史として、記憶として——「社会運動史」一九七〇—一九八五』が刊行された。その合評会は同年六月一五日に東洋大学で行なわれ、私は司会を務めた。同書を読み、司会の準備をする中で、私は『社会運動史』を読み直し、

先人たちの仕事に関する認識をあらたにした。この小文は、そのようにして得られた認識を記録に留め、共有するための覚書きである。

『社会運動史』はなぜヨーロッパ史研究から生まれたのか

研究会の創設も雑誌の創刊も、振り返ってみれば歴史上の一出来事であるが、当事者にとっては決断である。この決断は、一九七〇年代初頭の日本歴史学界の混乱に、活路を切り開こうとしてなされたものであった。歴史学界の主要な団体であった歴史学研究会（歴研）は、当時明らかな陥穽に陥っていた。それまで歴研には、戦後歴史学の批

批判的再検討を進めるだけのダイナミズムがあった。だが、七〇年安保の高揚は、かえってその柔軟性を失わせた。この時期に歴研が掲げた人民闘争史観や変革主体概念には、多様な人々のエネルギーのうねりに対して、統御可能な名前と方向性を与えようとする前衛党主義が顕著であった。歴研と、それが体現する戦後歴史学において前衛党主義の前面化が起こったのに対して、民衆の行動の論理そのものに密着しようとする。それが社会運動史研究会の立場であった。そのことは、『社会運動史』第一号（一九七二年）に掲載された木下賢一の巻頭論文「パリ・コミューン前夜の民衆運動——『労働の世界』と運動」や合評会「喜安朗『革命的サンディカリズム』をめぐって」などに明らかであった。

歴研および戦後歴史学の陥穽は、歴史学界全体にかかわることであったが、正面からその陥穽を乗り越えようとした社会運動史研究会は、もっぱらヨーロッパ史研究者から構成されていた。『歴史として、記憶として』の中で成田龍一は、日本史研究において社会運動史研究会に対応する世代が不在であるのはなぜかと問うているが、私は逆の側から同じ問題を考えてみたい。どうして社会運動史研究会という形をとった日本歴史学界の問い直しは、主にヨーロッパ史研究者のあいだから発せられたのであろうか。

一般的にいえば、前衛党主義がヨーロッパ史の理解と不可分なものであることが、その理由として挙げられよう。前衛という概念は、特定の方向に向かう歴史の「流れ」を前提としている。その方向を正しく見据え、流れの先頭に立つのが前衛の役割である。ここにある直線的な歴史像も、その目標として想定される社会主義社会像も、ヨーロッパ史を独特に解釈することで導き出された。その解釈は、啓蒙思想以来ヨーロッパ人自身が抱いていたものでもあるが、より具体的にそれを彫琢したのは、マルクスのように、近代ヨーロッパの内部にありながらアウトサイダー的な眼差しをもっていた人であり、より大規模にその体系化を行なったのは、ヨーロッパの周縁にいたソヴィエト・ロシアの理論家たちである。ヨーロッパから強力な影響を受けつつ、その歴史を外部からモデル化する点において、ソヴィエト・ロシアの理論家たちの営みは、一九二〇年代から第二次世界大戦後のある時期まで、ヨーロッパに対して同じような立場にあった日本の知識人の世界観を強く捕らえていたのである。それゆえ、前衛党主義と現実との軋轢もまた、ヨーロッパ史研究者にはいちはやく感得するだけの土壌があったといえよう。

より特殊には、一九七〇年代初頭までに、当の歴研をも舞台にして進められていた戦後歴史学の批判的継承の影響

を指摘することができる。ヨーロッパ史研究とかかわりの深い江口朴郎と上原専祿の二人が、その原点的な役割を果たした。他方、江口も上原も戦後歴史学を批判しつつより豊かにした人であるから、その議論には戦後歴史学と同時代的な弱点も存在した。社会運動史研究会の同人たちは、江口と上原の仕事を引き継ぎつつ、この二人よりもさらに先に歩を進めていったのである。

江口の歴史認識の基礎にあるのは、帝国主義時代のレーニン⇨スターリン的マルクス主義である。とくに、一つのエトノスが一つの領域をもち、歴史をつくる主体としてのネイションになるべきだ、という認識を制度化したスターリンの影響が江口には顕著である。現代史におけるエトノス/ネイションの役割を強調するスターリンの認識は、従属地域の人々を励ますことで、二〇世紀の政治運動がヨーロッパ中心主義を脱却するのを大いに促した。また、エトノス/ネイションを政治単位とすることは、広範な民衆の政治参加を呼びかけることでもあるから、第一次世界大戦後の大衆政治の時代にもよく合致していた。その一方で、エトノス/ネイションを政治参加に導く先覚者を想定する限りにおいて、スターリンにもレーニンの前衛党主義が引き継がれた。

一九六〇年代末から一九七〇年代初頭の日本の歴史学界

で人民闘争史観が提唱された際には、スターリン的なネイション重視の認識における大衆民主主義的な側面(「人民」と前衛党主義の側面との両方が露見していたといえる。当時の日本の歴史学界ではこのスターリン的認識は、コミンテルン指導者デイミトロフの統一戦線論および人民戦線戦術(一九三五年のコミンテルン第七回大会で提起された)において明確な像を結んでいた。デイミトロフのこの議論およびそこから導かれるファシズム規定を歴史的文脈に即して相対化したのが、『社会運動史』第二号(一九七三年)に発表された北原敦「ファシズムと共産党をめぐる諸問題——一九二〇年代のイタリア」である。『歴史として、記憶として』において北原は、「デイミトロフによるファシズムの定義なるものの呪縛を解いた」と振り返っている。これはまた、スターリン⇨江口の世界認識の脱構築でもあった。

次に、上原の歴史認識の基礎にあるのはウェーバーの「個性的把握」である。個性的なそれぞれの地域からなる「世界史」を意識的に設定することで、上原は戦後歴史学のヨーロッパ中心主義を江口とは別の角度から相対化することができた。その一方で、元来ドイツ史研究者であったにもかかわらず、戦後の上原には地域としてのヨーロッパをどうとらえるかという視点は後退していた。これは一九五〇年

代の世界におけるアジア・アラブ地域の現実の動向に強い衝撃を受けたからであるが、同時にまた、ヨーロッパ中心主義という戦前戦後の日本の左翼知識人の志向の裏返しであったともいえるだろう。

社会運動史研究会では、歴研との結びつきが強かった江口に比べ、上原の方により親近感がみてとれる。とくに『社会運動史』第六号(一九七七年)に掲載された加藤晴康「社会運動史」の方法をめぐって^⑩には、上原の影響が顕著である。「しかし、先を急ぎながら単純化して言えば、「世界史」という言葉をもちだすことで、われわれが関心を抱くのは、今日ある「世界」を生んだ「世界史」が「世界史」としてなりたってきた過程で、抹殺し排除してきたもの、「世界史」の下積となつて消えていった存在、「世界史」のその過程にちよっかいを出したがためにつぶれていったもの、あるいはその「世界史」の過程に壮大に立向かったもの、そういう存在であるといつてよいでしょう^⑪。こうして上原の「世界史」認識を踏まえつつ、加藤はそこからさらに、ポスト・コロニアリズムの地平に足を踏み出していく^⑫。

先述の通り、上原にはヨーロッパへの視点の弱さという問題があった。『社会運動史』の同人のうち、この問題を正面から批判したのが喜安朗である。社会運動史研究会の発足が準備されていた一九七〇年夏から翌年初頭にか

て、喜安は『世界史の研究』に「一九五〇年代の歴史意識および知識人について」を三回に分けて掲載している^⑬。戦後歴史学を批判的に再検討した力のこもったこの論文の第三回で、喜安は上原世界史の成果と問題点を論じている。とくに、上原・江口たちが編集にあたつた『世界史講座』第五巻「資本主義的ヨーロッパの制覇」については、喜安はいう。「本書の構成の主軸にすえられているのは、イギリス資本主義を中心とする世界市場の完成ということであり、このこと自体の重要性は否定すべくもないのであるが、こうした資本主義の発展がもたらす世界諸地域の矛盾の新たな形成に直面する大衆と、大衆の直面する生活現実の問題を、どこまでも追求しようとする構成にはなっていない」。

問題は単に、大衆に焦点が当てられていないということだけにあるのではなかった。喜安によれば、ほかならぬヨーロッパの特殊性こそが、ここで論じられなければならないはずであった。すなわち、「ヨーロッパ資本主義の世界諸地域を相互連関のもとにおいていく過程が、一九世紀前半期において最も集中していたのは何といつてもヨーロッパなのであり、そこに生み出されてくる矛盾と対決しようとする多様な民衆運動が発生し、しかもこの運動が民衆的な性格をとればとる程、決して一様ではないそれぞれの地域

の特殊な生活現実を発見し、それに根ざすものたらざるをえなくなっていたのである。この点が一九世紀前半のヨーロッパを世界史のなかでユニークなものたらしめていたのである¹⁵⁾。

ここにあるのは、なぜ他の地域ではなくヨーロッパ史を選ぶのかという自覚的な問いであり、それに対する力強い答えであった。グローバル化の中心であることによってかえって特殊性が生じるというこの独創的な（一九世紀前半の）ヨーロッパ理解が、喜安の民衆研究を裏打ちしていた。喜安にあつては、ヨーロッパ史研究者であることと、前衛党主義とは全く異なる民衆の生活現実に即した視角をもつことが、方法論において一体となっていたのである。

喜安朗と谷川稔と相良匡俊

前節で述べたことにもかかわらず、方法としての社会運動史には戦後歴史学と共通する側面が少なからずあつた。もし社会運動史を、静態的になりがちな社会史とは異なる、動態に着目した方法として理解するならば、それは今日なお歴史学にとつて有効である。『歴史として、記憶として』において石井や小田中直樹が肯定的に評価しているのは、社会運動史のこの側面である¹⁶⁾。

しかし、社会運動史が、よりよき秩序の可能性を内包するものとして民衆の運動をとらえる視角をとるならば、それはあるべき到達点に向けての「運動」という、突き詰めれば前衛党主義と同じ歴史認識に基づいていたことになる。「革命運動の、あるいはよりよき革命運動の延長上に現代の問題を置くことで、何か期待をつなぐこと」と『社会運動史』第一〇号（一九八五年）で木村靖二が述べているのは、社会運動史のそのような側面である¹⁶⁾。この場合、社会運動史は戦後歴史学と同様に、研究者による理想社会の探究という負荷をかけられていたといえる。小田中が、戦後歴史学に対する批判としては「社会運動史」は、歯車を回しきれなかったのだ」とするのは、その限りではうなずける¹⁷⁾。

とはいえ、『社会運動史』誌上の議論は、かなり多様な要素を含んでいた。創刊号の編集後記で藤本和貴夫が、「社会運動史」という一九七〇年代の日本語としては、さしあたりあまり明瞭なイメージをとまわらない、しかしまたそれ故に、内容を限定されることなく、「言いたいことを言う」雑誌の発行を、われわれが考えはじめたのは二年ほど前であつた」と記しているようにである¹⁸⁾。なかでも、一般に社会運動史という言葉から想起されるような、民衆運動あるいは日常生活への密着をはかる系列とは別に、民衆運

動と国制史とを連結させて、体制成立のダイナミズムをとらえようとする系列が存在したことは、『社会運動史』の大きな特徴であろう。北原のフアシズム研究、木村のドイツ革命研究、石井のロシア革命研究などがそれにあたる。ただし、二つの系列の違いはあくまで相対的なものである。二〇一三年六月一五日の合評会で、北原は私の質問に對して、二つの系列があったという意識はなかったと教えてくれた。社会運動史という視角のもつ可能性の広さが、ここには示されているといえるだろう。くわえて、民衆運動の場に密着した喜安の革命的サンディカリズム研究にしても、実は第三共和制の体制論および植民地論とセットであった²⁰。

その、民衆運動に密着した系列であるが、まさにここにおいてこそ、社会運動史の方法論がもつとも高い密度をもって議論されたのである。三人のサンディカリズム研究者がその中心にいた。喜安朗、谷川稔、相良匡俊である。

谷川による喜安『革命的サンディカリズム』の書評は、一九七二年夏の『季刊社会思想』にでた。喜安の著作が論じきれなかった点を、思想的側面と組織的側面の両方について指摘しているのは、時代の全体的把握に秀でた谷川らしい。前者についてはサンディカリズムを把握する際にソレルを割愛したことの妥当性が問われ、後者については

サンディカリストの依拠する労働総同盟による労働者の組織化率の低さが指摘された²¹。

喜安の反論は『社会運動史』第二号(一九七三年)に載った。「谷川は」運動の展開とは別個なものとしてその思想構造を扱いうるという視角を多分にもっている」と、喜安は反論した。労働総同盟による組織化率の低さについては、革命的サンディカリズムには「労働の世界」に密着せんとする方向と、そこから運動の流れを形成しようとする方向」のあいだに矛盾があったのであり、「革命的サンディカリズムと「労働の世界」の連関と相違」を説明することが重要であるとした²²。

喜安がいつている「労働の世界」とは、『革命的サンディカリズム』の「はじめに」において「十九世紀末の労働者の生活や意識によつてなり立つ労働の世界」と述べられているものことである。だが、『社会運動史』第一号の合評会で喜安自身が認めているように、その具体的なあり方について『革命的サンディカリズム』の中でとらえられているわけではなかった。なお、喜安が合評会で「労働の世界」というのが大体歴史性を持ち得るかどうかというのかわからない」と述べているのは、社会的ないし人類学的なアプローチの萌芽がすでに現れていることを示しており興味深い²³。とはいえ、ひとまずこの時点では「労働の世界」

がブラックボックスである以上、谷川に対する喜安の反論は成功しているとはいいがたかった。

ここにおいて、喜安、谷川とは異なる視点から論戦に参入してくるのが相良である。「一八九〇年代のフランス社会主義運動——第六区革命的社會主義者連合」は、『社会運動史』第四号（一九七四年）に発表された。一八九〇年代のパリの「小さな社会主義者グループとそのメンバーについて、いささか風俗誌風に記述する」というこの論文は、『社会運動史』誌上もつとも異彩を放つ一本である。パリ留学中に得られた文書館史料に基づくこの論文は、文末に典拠一覧があるだけで、注は付されていない。また、その分析対象は、社会「運動」の動態ではない。有名無名の思想家・活動家の思想を運動の一側面として追うことや、党派間の関係を整理することや、あるいは活動家の生活における政治的側面とそれ以外とを分離して考えることは、原理的に否定されている。そうではなく、ある社会主義者グループの生活様態が、その行動規範や表現手段の次元で包括的に再構築されるのである。たとえば、「夜の九時頃から一一時頃まで、時には討議に熱中し、時にはのどかにダベリ、そして、時には、その後で一杯飲んで帰る、という恒例の集会、更に放歌高吟、酒をヒツカケながらのダンス、くじ引きの当りはずれに大騒ぎする家族会、等々から

浮び上るのは、些程豊かでない都市生活者にとつての重要なテーマ、交友関係の獲得というモチーフである」。あるいはまた「発言の矛盾を気にせず、考え方、思想の差異を見分け、自分達の考えと行動、他人のそれ等々の異同と筋を気にする、という発想はなかった。今日思想と呼ばれるものが、要するに重視されていなかったのである」²⁶。

本稿が注を付された形で完成されていれば、またそのような形で一冊の本へとまとめられていれば、どれほどよかったであろうという感慨は否めない。「はつきりいって検証可能性の少ない文章」という谷川の批判は正しい。その後、事実として、相良の仕事はあまり進まなかったのであるが、それはなぜなのであるか。二〇一三年六月十五日の合評会で配布された相良の文章には、「わたくしは、その当時、谷川の批判を相当深刻に受け止めていた」とある。『社会運動史』第四号の論文を書くにあたり、史料の原文とその素訳をも記すべきだと考えていたが、きわめて煩瑣であったため、作業をすぐに放棄してしまった。「わたくしの仕事は実に横着なものとなった。だが、横着な仕事をするのは何とも快適で、そのうちに快感すら覚えるようになった（…）。ズルをしたという意識があったので、谷川の指摘がこたえたのである」²⁶。また、『歴史として、記憶として』に寄せられた相良の「暗中模索のころ」には、

『社会運動史』廃刊の頃から勤務先の大学での仕事が忙しくなつて研究ができなくなった、「今にして思えば、忙しくなつてできなくなったのではなく、できなくなったので忙しくなつたというのが本当だつたような気がする」とある。

これらの説明が正しいのであろう。だが、より研究そのものに内在する問題もあつたのではないか。ひとつには、一九七〇年代初めという早い時期に留学した相良が、本国の歴史研究の方法(革命的サンディカリズム研究を続けたいという希望はすでに他のものが取り組んでいるという理由で指導教官によつて退けられ、必ずしも本意ではなしにアルマヌ派を研究することになつた)、および大量の史料を前にしたとき、それらに圧倒されもすれば、日本という環境で西洋史研究を行なうことの意味について深刻な疑問を抱きもしたであろう。もうひとつには、史料総体の中に見出した過去の全体像の叙述という相良の目標と、史料に基づく過去の再構築という歴史学の方法とのあいだにある壁に、つきあつていたのではないだろうか。いずれの問題も、今日の私たちのものである。それゆえ相良のこの論文は、その形式上の欠陥も含めて、『社会運動史』誌上、もつとも現在の論文なのである。

喜安、谷川と、相良の直接の論争は、『社会運動史』第

六号(一九七七年)に始まる。相良の「社会運動史の方法のために——革命的サンディカリズム研究の回顧」が、この号と第八号(一九七九年)とにまたがつて発表されたのである。そこで展開された方法論をめぐる思索は、個人々人に対する批判をはるかに越える展望をもつものであつた。

第六号(一九七七年)に掲載された第一部で、もつぱら批判の対象となつているのは喜安ではなく、サンディカリズムの思想を理解するためにはソレルの分析が欠かせないとする、谷川による上述の喜安評である。相良はひとり谷川の議論ばかりでなく、思想的アプローチ一般の常道に対する根底的な問い直しを行なつていく。「志向の伝達は記述により、あるいは少くとも言語的な形態によつて行なわれる、ということが、私達の世界では共通の了解、というよりも常識、ないし無意識の内においてもとられる行動のスタイル、さらには私達の行動を律する規範となつてしまつている(…)。だが、当面の問題は、革命的サンディカリズムの運動の存在した社会空間に、そのような共通の了解があつたか否かである」。実際には一九世紀末フランスの労働者は、「何らかの事態に直面して、自らの立場にもついで、それについての感慨や評価、事態への対処のしかたを表明しなければならぬ時、勿論言葉も使つたが、むしろ何らかの行動によつて表したのである」。それが可

能であったのは「事前の共通性、即ち感情や欲求といった類いのものを持っていたからに他ならない」。それゆえ「事前に成立している人間関係の内に生じる送り手―受け手の関係」を問わねばならない。

相良はさらに、「ソレルの言葉によって一つの構図を作成し、それを透して現実の事象、革命的サンディカリズムを眺める」として、谷川のアプローチを批判する。革命的サンディカリズムをある思想に還元しようとしたわけではない谷川にこのようにいうのは、筋違いである。しかし、思想史の方法に対する相良の問い直しが、研究者の立場自体の根底的な相対化をもたらしたことの意義は大きい。相良はいう。「革命的サンディカリズムの研究方法は、異なる事物のありようを、できる限り忠実に復元し、そこにある、私達が明瞭な認識の内に採り入れることを忘れている価値を発見しうるものでなければならず、さらに、残念ながら大した成算があるわけではないがそうしたものを把握しえない今日の私達の、方法や概念や、それらを成り立たせている発想の性格を浮き彫りにしうるものでなければならぬ」と思うのである²⁶。

第一部が革命的サンディカリズム研究における「思想史的分析方法の検討」であったのに対して、第二部は「政治史的な分析方法の検討」である。第一部が谷川批判であっ

たのに対して、第二部は喜安批判である。まず、革命派と改良派を喜安のように峻別できるのかという谷川の前掲書評での問いを取り上げ、相良はこう記す。「私達は理論上の対立が組織のレヴェルから、はては毎日の付き合いに至るまで、全てに及ぶ社会に住んでいるので、どうしても他の社会について同じように考えてしまうとところがある。言いかえれば、過去の世界から逆に照してみると、私達の世界は、社会生活の全てが系列化された、独特の編成と配置の操作のしくみのある社会なのである」。ここでもまた、相良は研究者自身の置かれている立場や、それを取り巻く社会のあり方を相対化している。

ついで相良は、喜安においては「労働者」ではなく、その活発な部分としてのミリタンしか登場しないという。そのミリタンも抽象的な存在でしかない。「古い流行語で言えば、変革の主体。それは特定の動きを示すことによって始めて存在理由を与えられる。その点では、ミリタンもまた観察の対象ではない。観察されるのは、動き、すなわち、運動である」。これは、方法としての社会運動史におけるレンズデートル、つまり「運動」への着目が、相対化の俎上に載せられた瞬間であった。

相良はまた、次のようにも記す。喜安にあつては、「ア
II
プ
リ
オ
リ
に
設
定
さ
れ
た
状
況
が
あ
り
、
次
い
で
そ
れ
に
対
応
す

る運動が置かれて成立する」。しかも、その状況とは、「多様な側面をもつ社会生活の、ただ政治的な側面のみについての」ものであり、かつ今日の状況と同一視されたものであると。このようなやり方を、相良は「人間に対して運動を、運動に対して状況を先行させるスタイル」であると呼んだ。ここにおいて、社会運動史は脱構築されたといつてよい。歯車が回ったのである。

相良は喜安の歴史研究の手法を次のように整理している。それは、「今日の世界と類似した、少なくとも同一視しうる世界を設定し、それについての好悪の判断に基いて、あるべき動きをした運動を摘出し、それがどのように判断し、どのように行動したかを明らかにする、というものである」。ついで、このようなスタイルは日本の歴史学における構造的な特徴であるとして、議論は一般化されていく。そうした特徴が生じたのは、後発的に近代化を達成しなればならなかった国家における選択の結果である。「日本の状況は如何にあり、如何になればならないか、そして、それに際して、国家の採るべき政策の如何、等々」が最優先で問われた。官学型歴史学に対抗した側、とくに社会経済史も、「国家という言葉の替わりに社会、あるいは人民」とポキャブラリーは違っていても、同じことがあてはまる。「要するに、それは司令官の発想と言うにふさわしい。ま

ず状況ありき。人々はようやく、その後で、教育し、動員し、編成すべきものとして登場し、有効な指導の下に始めて、歴史変革の主体たるの役割を与えられる」。

相良のこの近代日本歴史学に対する批判は、根源的なものである。歴史学の社会的役割という考え方を放棄しない限り、「司令官の発想」はどれほど謙虚な姿勢をとつても残り続けるだろう。その点で私は喜安と同じ側にいる。だが、それだけにいつそう、相良のいつていることを忘れてはならないのである。

おわりに

社会運動史研究会の同人たちは、実証論文を書くことの苦しみに向き合ったのと同じくらい、方法論を模索する苦しみに正面から向き合った。『社会運動史』は方法としての社会運動史を追求する場であると同時に、社会運動史という視角の妥当性を常に問い直す場でもあった。『社会運動史』という「名のり」は「われわれにとつて便宜的なものにすぎなかった」と加藤が記しているのは、その端的な例である^①。また、岡本充弘が「思想」は「やはり結局は個人に始まり、個人に終るものでしかない」と述べているのも、思想史の方法論を突き詰めて考えた結果である

う。³²⁾

率直な議論の中で、社会運動史という方法は徐々に相対化されていき、過去をより脱理想化し、より全体的に把握する、その意味で社会史の中の最良のものに変貌していった。最終号の座談会「社会運動史の回顧と現況」で、「社会史ブーム」に対する違和感が口々に表明されているのは、社会史のもつ「好事家的」側面への警戒もあっただろうが、気がついたら自分たち自身が社会史の地点にまでたどりついてしまっていたことへの当惑もあっただろう。³³⁾

『社会運動史』終刊後もその同人は、おのおのの仕方方法論を問い直し続けた。『歴史として、記憶として』の中で山本秀行が、「民衆」は、まだ集合的で、「人民」概念のニュアンスが残っているので、思い切って「普通の人びと」と読み替えました」と記しているのは、そうした問い直しのひとつの到達点であろうし、嘉言であった。³⁴⁾『社会運動史』誌上で方法論をめぐる議論を深化させる核となった三人のうち、喜安は谷川や相良、それに木下賢一から学びながら、社会的結合をめぐる分析の地平を切り開いていった。³⁵⁾谷川は「近代社会史研究会」を旗揚げして、³⁶⁾相良は二〇一二年春に大学を定年退職し、「再びフランス近現代史の若手研究者に戻ることに」決めた。それから

一年数か月ののち、病気で帰らぬ人となった。アルマヌ派をテーマとする、若手フランス近現代史研究者として死んだのである。³⁷⁾

註

- (1) 喜安朗・北原敦・岡本充弘・谷川稔編『歴史として、記憶として——『社会運動史』一九七〇—一九八五』(御茶の水書房、二〇一三年)。
- (2) 戦後歴史学については、第二次世界大戦後の日本歴史学界において基調をなした潮流として、おおまかに考えておきたい。その特徴は近現代ヨーロッパないし社会主義ソ連を到達点とする単線の発展史観であり、日本共産党との関係が密接であった。アジア各地での社会主義運動や民族運動の高揚、冷戦の本格化とそれへの日本の組み込みなどによって、一九四九年—一九五〇年を転機として、ヨーロッパをモデルとする戦後歴史学の単線の発展史観の見直しが始まった。それでもおおむね一九七〇年代末までは、日本の歴史学界において規定的作用を果たしていたと考えてよいであろう。以下、戦後歴史学とその批判的継承、とくに江口朴郎と上原専祿の果たした役割については、池田嘉郎「ロシア史研究の中の戦後歴史学——和田春樹と田中陽児の仕事を中心に」『史潮』新七三号、二〇一三年、を参照されたい。
- (3) 人民闘争史観のもつ先祖返り的な側面については、二〇一三年六月—五日の合評会で評者のひとりであった戸邊秀明から教示をえた。
- (4) 木下賢一「パリ・コミュニケーション前夜の民衆運動——『労働の世界』と運動」、および「座談会 喜安朗『革命的サンディカリズム』をめぐる」『社会運動史』一号、一九七二年。
- (5) 成田龍一「日本史研究の『失われた八〇年代』」喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収。喜安朗「一九五〇年代の歴史意識お
- 編『歴史として、記憶として』所収、三〇八—三二一頁。
- (6) ソヴィエト・ロシアのコスモロジーが戦前戦後の日本知識人に与えた影響について、石井規衛のブリリアントな論文をみよ。石井規衛「ソヴィエト・ロシアの時代」の歴史知と『社会運動史』喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収。
- (7) スターリン時代の民族政策について、池田嘉郎「ソヴィエト帝国論の新しい地平」『世界史の研究』二三四号、二〇一三年、参照。
- (8) 北原敦「ファシズムと共産党をめぐる諸問題——一九二〇年代のイタリア」『社会運動史』二号、一九七三年。
- (9) 北原敦「雑誌発刊のころ」喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収、七九頁。デイミトロフと江口の議論に共通性を見出せるというのは、塩川伸明の着眼である。塩川伸明「喜安朗・北原敦・岡本充弘・谷川稔編『歴史として、記憶として』に寄せて」五頁(二〇一三年七月執筆、塩川のホームページで公表)。
- (10) 喜安の江口理解として、喜安朗・成田龍一・岩崎稔「立ちすくむ歴史——E・H・カー『歴史とは何か』から五〇年』(せりか書房、二〇一二年)一六一—一七七頁、参照。
- (11) 加藤晴康「社会運動史」の方法をめぐる——社会運動史研究会合宿報告』『社会運動史』六号、一九七七年、六二頁。
- (12) 加藤晴康「ハイチ革命の意義によせて」『社会運動史』一〇号、一九八五年。
- (13) 「社会運動史研究会略年表」喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収。喜安朗「一九五〇年代の歴史意識お

- よび知識人について(一〜三)』『世界史の研究』六四号、一九七〇年・六五号、一九七〇年・六六号、一九七一年。
- (14) 喜安「一九五〇年代の歴史意識および知識人について(三)」「二〇、二二頁。上原専祿・江口朴郎ほか編『世界史講座Ⅳ』(東洋経済新報社、一九五四年)。
- (15) 石井「ソヴエト・ロシアの時代」の歴史知と『社会運動史』二四四頁。小田中直樹「社会運動史」のリハビリテーション」喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収、二六九頁。
- (16) 木村靖二「ドイツ革命研究に関する二、三のメモ」『社会運動史』一〇号、一九八五年、七〇頁。
- (17) 小田中「社会運動史」のリハビリテーション」二六五頁。
- (18) 藤本和貴夫「編集後記」『社会運動史』一号、一九七二年。
- (19) 北原敦「ファシズム時代の大衆の組織化」『社会運動史』七号、一九七八年。石井規衛「革命ロシアにおける党Ⅱ「国家」体制の成立」『社会運動史』九号、一九八一年。木村「ドイツ革命研究に関する二、三のメモ」。
- (20) 喜安朗「第三共和政の形成とフランス植民地主義」『史艸』八号、一九六七年。同「フランス第三共和政の形成と政治支配の論理——ブルジョワ支配と「制度民主主義」」『歴史学研究』三五〇号、一九六九年。
- (21) 谷川稔「書評 喜安朗『革命的サンディカルズム』」『季刊社会思想』二二二、一九七二年。
- (22) 喜安朗「『革命的サンディカルズム』批判をめぐって」『社会運動史』二号、一九七三年。
- (23) 喜安郎「革命的サンディカルズム」(再刊)』(五月社、一九八二年)(初版一九七二年)、一四頁。「喜安朗『革命的サンディカルズム』をめぐって」二九頁。
- (24) 相良匡俊「一八九〇年代のフランス社会主義運動——第六区革命的社會主義者連合」『社会運動史』四号、一九七四年、一、二七、三九頁。論文成立の経緯は、相良匡俊「暗中模索のころ」喜安ほか編『歴史として、記憶として』所収、一三五—一三七、一四二—一四四頁。近藤和彦が、相良のこの論文を日本の近現代史研究における社会史の先鞭として高く評価したことは、注記するに足る。近藤和彦「社会史・戦後歴史学・わが営み」『社会運動史』一〇号、一九八五年、六〇頁。
- (25) 「座談会 社会運動史の方法を巡って」『社会運動史』八号、一九七九年、六三頁。
- (26) 相良匡俊「補遺」。二〇一三年六月一五日の合評会で配布。
- (27) 相良「暗中模索のころ」一三四頁。
- (28) 相良「暗中模索のころ」一三六—一四一頁参照。
- (29) 相良匡俊「社会運動史の方法のために——革命的サンディカルズム研究の回顧」『社会運動史』六号、一九七七年、七八、八〇、八二、八三、八五、八六頁。
- (30) 相良匡俊「社会運動史の方法のために(二)——革命的サンディカルズム研究の回顧」『社会運動史』八号、一九七九年、七〇、八一、八四、八六、八八、九〇頁。この論説とは対照的に、相良匡俊「革命的サンジカルズムについての『現代史研究』」二二二、一九六八年では「運動」史に対する相対化の姿勢はいまだ弱い。この間の相良の認識の深化が窺われる。
- (31) 加藤「社会運動史」の方法をめぐって」五七頁。
- (32) 岡本充弘「近代日本の思想家三人の伝記をめぐって——木

『社会運動史』覚書き（池田）

下尚江、大杉栄、国崎定洞「『社会運動史』七号、一九七八年、六一頁。

(33) 「座談会『社会運動史の回顧と現況』『社会運動史』一〇号、一九八五年。

(34) 山本秀行「自分に跳ねかえってくる時代の歴史学」喜安ほか編『歴史として』所収、一二八頁。

(35) たとえば、喜安朗『パリの聖月曜日——一九世紀都市騒乱の舞台裏』（平凡社、一九八二年）。

(36) 谷川稔「全共闘運動の残像と歴史家たち——社会運動史から社会史へ」喜安ほか編『歴史として』所収、二一〇頁。

(37) 相良「暗中模索のころ」一三四、一四四頁。

（東京大学大学院人文社会学系研究科）